

チアダンスにおける指導者評価項目の信頼性

本郷 珠美

キーワード：チアダンス，評価，指導者

Reliability of evaluation items for instructor in cheer dance

Tamami Hongo

Abstract

The cheer dance having origin in America has become a popular sport in Japan in recent years. However, there is no unified license to become an instructor of cheer dance. Therefore, the skills required for the instructor and its evaluation are different for each organization. The purpose of this paper is to examine reliability of evaluation items for the instructor in the cheer dance.

The state of dance lesson by six instructors was recorded using digital video camera. Three evaluators watched the obtained VTR images and evaluated 16 items for their dance lesson in five grades. Using the intraclass correlation coefficients (ICC), the degree of concurrent between evaluators was examined.

As a result, in the case where concrete expressions that serve as criteria for evaluation are included, the degree of concurrent were relatively high. And avoiding expressions that are not suitable for evaluating subjective mind of students or instructors raised the degree of agreement.

Key words: cheer dance, evaluation, instructor

I. 緒言

1. 研究の背景

チアダンスとは、チアリーディングから派生したスポーツである。チアダンスの元となるチアリーディングは、およそ100年前にアメリカの大学で母校のフットボールチームを応援するために誕生したと言われており、当初は男子学生による声援の形式だった(日本チアダンス協会、online)。現在チアリーディングとは、主にタンプリングやスタントと呼ばれるアクロバティックなものを含む競技を意味する。

チアダンスは、チアリーディングの中のダンス部分を独立させた競技である。約2分半の時間内でダンスの技術や振付け構成、チームとしての一体感や表現力などが採点の対象となる。

日本チアダンス協会 (online) によれば、「競技者の笑顔や迫力ある演技によって見るものを元気付け、また競技者自身も元気になれるスポーツ」、「競技人口は子供から大人まで幅広く、それぞれの年代に合った楽しみ方ができるスポーツ競技」とされている。cheerが元気づける、勇気づけるという意味であることから、競技自体が他者を応援することを目的とし、競技者自身がチアアップされるという点で、どのダンス競技とも異なる。

本場アメリカのNFLやNBAのハーフタイムで活躍するチアリーダーや、ブロードウェイで活躍するダンサーはチアダンス出身者が多いということもあり、エンターテインメント性の高いスポーツであるといえる。

日本では、2000年代に映画やテレビ番組の企画で火が付き、全国的な盛り上がりを見せ、年々競技人口が増えている(日本チアリーディング協会、online)。

活動内容も多岐にわたり、競技スポーツとして、健康や楽しみとして、またプロスポ

ーツにおいては、チアリーディング、チアダンスの競技技術を生かしたエンターテインメントとして欠かせない存在として確立されつつある。

学ぶ場も幅広く、部活動として、習い事の一つとしてのチアスクール、カルチャーセンターの一講座として開講されるものもある。

プロスポーツの応援を活動の主とするチームや、その下部組織としてのスクール、地域の応援団として活動するチームもある。同じ表現方法を取りながらも、活動内容、活動頻度、活動目的が異なるがゆえに、それぞれの教室、スクール、クラブによって求める指導者像は異なる。

チアダンスの競技人口は、30万人以上とも言われ(ワールドスポーツコミュニティ、2013)卓球の競技人口に匹敵するほどに人気を博しているが、協会が乱立し、統一された指導ライセンスはないのが現状で、共通の尺度がないのが現状である。

筆者が勤めるチアダンススクールにおいては、指導者(インストラクター)に対して、いくつかの指導者評価項目によって指導力の評価を行っている。その評価は、評価者の主観的な判断に委ねられているため、評価者が変わることによって評価が異なってしまう可能性が考えられる。そのため、評価者内での評価の一致度合いをみて、評価項目の信頼性を検討する必要があると考え、本研究に至った。

本研究によって得られた知見に基づき、信頼性の高い評価項目の検討を進めていくことで、評価者と指導者の相互理解と、指導者のスキル向上に役立つと考える。

2. 研究目的

チアダンスにおいて、指導者(インストラクター)の指導力の評価に用いる「指導者評価項目」の信頼性を検討することを目的と

する。

3. 研究方法

指導歴6年から12年のインストラクター3名が評価者となり、指導歴半年から4年のインストラクター6名を被験者として、ビデオ撮影したレッスン風景からその指導内容について評価項目を用いて主観的に評価する。

(1) 評価者

評価者は、いずれも複数年の指導歴を有し、現在も後進の育成に携わっているインストラクターを評価者とした。

・評価者1

インストラクター歴14年目
スクール運営者

・評価者2

インストラクター歴9年目
スクール内最高レベルチームの担当者

・評価者3

インストラクター歴6年目
インストラクター管理者

(2) 被験者

被験者は、いずれも評価者と同じ団体に所属しており、現在、指導者として活動を行っているインストラクターとした。

・被験者1

インストラクター歴4年目

・被験者2

インストラクター歴3年目

・被験者3

インストラクター歴3年目

・被験者4

インストラクター歴2年目

・被験者5

インストラクター歴1年目

・被験者6

インストラクター歴1年目

(3) 評価対象

被験者となるインストラクターが、2016年4月から担当する幼児から小学6年生までの、2学年ごとに構成されたクラスを対象とする。いずれも評価者が担当していないクラスを選定した。

各クラスのレッスンを同年7月に撮影を行った。会場の後方に設置したビデオカメラでレッスン開始とともに撮影を開始し、レッスンを終了するまで撮影を止めることなく最後まで撮影した。

(4) 評価方法

上記の映像を評価者それぞれが閲覧し、評価項目について主観的に5段階で評価した。

5段階評価は、5を最も高く、1を最も低い評価とし、5は「十分にできている」、1を「十分にできていない」、3を「普通」、その間を2と4とした。また映像から確認できないと判断したものは未記入とした。

(5) 評価項目（質問項目）

本研究では、16項目からなる評価項目を用いた。(Table 1)

(6) 分析方法

3名の評価者から得られた、各被験者に対する5段階の評価の一致度合いを見るために、質問項目ごとに二元配置変量の絶対一致による級内相関係数 (Intraclass correlation coefficients : ICC) を求めた。いずれも有意水準は危険率5%未満で判定した。

II. 研究結果

16項目のうち3項目（質問6、質問12および質問14）は、欠損値を含むため除外した。(Table 1)

Table1. 評価者間の級内相関係数, 95%信頼区間および標準誤差

質問項目(評価項目)	ICC	有意差	95%信頼区間		絶対誤差
			上限値	下限値	
1 論理的な説明ができていますか	0.828	**	0.973	0.355	0.471
2 学年に応じた言葉遣い、用語の選び方ができていますか	0.771	**	0.965	0.033	0.527
3 全体に聞こえる声量で話しているか	0.680	*	0.948	-0.073	0.850
4 注意をひくような話し方、間の取り方、抑揚をつけているか	0.882	**	0.983	0.376	0.624
5 目を合わせて話をしているか	0.866	**	0.980	0.395	0.471
6 人間的教育を実施しているか	欠損				
7 正しいデモンストレーションを行っているか	0.669	ns	0.948	-0.164	0.667
8 視野を広く持ち、全体を把握しているか	0.739	*	0.959	0.069	0.624
9 安全に配慮をしているか	0.615	*	0.934	-0.175	0.577
10 積極的に生徒の名前を呼んでいるか	0.334	ns	0.856	-0.125	1.247
11 指導マニュアルを元に、個人・クラスに合う目標を設定し、計画的に指導しているか	0.740	**	0.958	0.055	0.471
12 スクール生の性格を把握し、適切な指導法を選択しているか	欠損				
13 状況に応じた指導方法を数多く身に付けているか	0.872	**	0.981	0.440	0.601
14 自分の想いや考えを相手に的確に説明し説得することが出来るか	欠損				
15 シチュエーションにあわせた適切な言葉遣いができていますか	0.828	**	0.973	0.352	0.333
16 指導方法がどのように有効に作用するか、指導を分析しているか	0.803	**	0.970	0.183	0.527

ICC = intraclass correlation coefficient; SEM = standard error of measurement. **p<0.01 *p<0.05

Ⅲ. 考察

本研究では、評価者の主観的判断に基づく被験者に対する評価の信頼性を検討するために、Shrout and Fleiss (1979) の分類に基づく 2 元配置変数効果モデルの ICC (2, 1) を用いて評価者間の一致度合いをみた。ICC の判定基準はいくつかある (桑原ほか, 1993 ; Portney and Watkins, 1993 ; Landis and Koch, 1977) が、ICC の値が 0.7 以上であれば信頼性は良好であるとされている (対馬, 2011)。

被験者となるインストラクター 3 名の一致度が高かった項目は、いずれも具体的な表現で表記されていることが特徴である。ICC の値が 0.882 と最も高い値を示した質問 4 「注意をひくような話し方、間の取り方、抑揚をつけているか」は、説明のわかりやすさ、聞きやすさを確認する項目であるが、その確認方法として「話し方、間の取り方、抑揚」の 3 点について確認をしている点で具体的である。一方、同様に説明のわかりやすさを確認する質問 14 「自分の想いや考えを相手に的確に説明し説得することが出来るか」では、評価できないと判断してデータの欠損が多くみられた。「自分の想いや考え」つまり被験者の想いや考えは、被験者の

口から出た時点で受け手の解釈が介在するため 100%被験者の解釈の通り理解することはできないことに加えて、「相手に的確に説明し説得すること」については、受け手が説得されたかどうかを受け手の主観であるため、それを第三者である評価者が判断することは難しいものと推測される。的確に説明しているかを確認する手段として、「論理的」という基準を設けた質問 1 「論理的な説明ができていますか」について ICC の値が 0.828 と高かったことから、具体的な判断基準を設けることが、評価者の判断のばらつきを少なくすると推察される。

質問 15 「シチュエーションにあわせた適切な言葉遣いができていますか」、質問 2 「学年に応じた言葉遣い、用語の選び方ができていますか」もそれぞれ ICC の値が 0.828、0.771 と高い値を示した。シチュエーションや学年という基準が指示されている分、一致度が高かったと考えられる。

質問 9 「安全に配慮をしているか」については、ICC の値が 0.615 と 0.7 より小さく、p<0.05 で有意ではあるが、信頼性が高いと言えなかった。スクール生自身で配慮できる学年の場合、安全について働きかける場面が少ない。特にチアダンスという競技は

集団競技であることと同調性が求められるスポーツであることから、経歴が長くなればなるほど集団行動に長け、前後左右の間隔をとって整列したり、他者との距離を見て行動することができるようになる。そのため、映像から安全に対する声掛けが少ないと判断するか、安全だから声をかけていないと判断するかで評価がばらつく可能性があるといえる。

質問 11「指導マニュアルを元に、個人・クラスに合う目標を設定し、計画的に指導しているか」については、ICC が 0.74 と高い値を示した。個人・クラスに合う目標設定かどうかを評価者が判断するには、個人・クラスに関しての理解が評価者全員に共通理解として必要であるが、今回の評価者はいずれもインストラクター歴が長く、多くのスクール生を把握している点で一致度が高かったと考えられる。今回評価対象としたクラスが 2 学年ごとに構成されたクラスであることから、指導マニュアル内に学年ごとの目標設定がなされており、クラスの詳細を知らない場合でも目標設定については評価できるが、計画的に指導しているかについては、継続的に観察する必要があるため、インストラクター歴の短い評価者が同項目で評価した場合には、一回だけの映像からは判断が難しい可能性も考えられる。

データの欠損がみられた質問 12「スクール生の性格を把握し、適切な指導法を選択しているか」については、スクール生一人ひとりの性格を評価者が把握していない場合、評価することができないため、指導が適切であるかの判断以前に回答が難しいものと考えられる。

同じく欠損が多かった質問 6「人間的教育を実施しているか」については、欠損の理由を評価者にインタビューを行ったところ、「映像内に人間的教育が必要とされる場

面が見受けられなかった為判断しかねた」との回答を得た。また、人間的教育の判断基準が具体的でないことも理由の一つとして検討する余地がある。

ICC の値が 0.334 と低く、有意水準を満たしていない質問 10「積極的に生徒の名前を呼んでいるか」については、「積極的」の部分が、名前を呼ぶ頻度であるのか、声の大きさであるのかなど、解釈が評価者間で曖昧となり、一致度が低かった可能性が考えられる。また、今回の映像が実技指導部分のみであったため、個々人との時間が自由にもてる集合から練習が始まるまでの間や、練習が終わってから解散するまでの時間も含めて評価した場合に、異なる結果がでることが可能性として考えられる。

同じく有意水準が満たされなかった質問 7「正しいデモンストレーションを行っているか」については、デモンストレーションの回数が少ないことによるものか、デモンストレーションの質によるものかを分けて検討することで精度が高まる可能性がある。

IV. まとめ

本研究の目的は、チアダンスにおいて、指導者(インストラクター)の指導力の評価に用いる「指導者評価項目」の信頼性を検討することであった。

指導者 6 名の指導をデジタルビデオカメラを用いて撮影し、その映像を基に 3 名の評価者が、16 の質問からなる評価シートを用いて各々 5 段階評価で採点した。その結果、以下のことが明らかとなった。

- 1) 具体的な表現で表記されている質問については、評価者間での一致度が高かった。
- 2) 質問に当てはまるかどうかを判断するための、具体的な判断基準を設けた質問のほうが、一致度が高かった。
- 3) 被験者の状況や個人の特性を評価者が

把握していないと判断できない質問については、一致度が低かった。

- 4) 被験者の主観を推察する質問は一致度が低かった。
- 5) ばらつきが大きかった質問については、評価するために必要な回数が実施されていなかったのか、質として不十分だったのかを分けて確認する必要がある。
- 6) 継続的に観察することで判断が可能となる質問と、即時評価が可能な質問を分ける必要がある。

これらのことから、評価項目には、判断の基準となる具体的な表現で項目を設定することと、被験者となるインストラクターやレッスンを受講するスクール生の主観を推察するような項目設定を避けることで、評価者が複数であるときに信頼性の高い評価項目となることが明らかとなった。

V. 今後の課題

本研究では、具体的な表現と判断のための基準が設けられている質問項目は一致度が高く、評価をする際に評価者のみの主観で判断できる項目であることがばらつきを抑えることが分かった。このことから、質問項目を設定する際は、回りくどい言い回しや、抽象的な表現を避け、端的に具体的に表記することが重要になるであろう。例えば、質問8の「安全性に配慮できているか」については、「前後左右の間隔はとれているか」「水分補給の機会を設けているか」など、チアダンスにおいて配慮すべき安全項目を具体的に分けて記載することも方法の一つと考える。質問7「正しいデモンストレーションを行っているか」についても、デモンストレーションを行っているかどうかの事実確認と、行われているデモンストレーションが適切であるかの質の確認を分けて設定することが可能である。

項目を新たに設定し、今回の研究手順で

繰り返し検証を重ねることにより、信頼性の高い評価項目となる可能性はある。しかしながら、本研究においては時間的な制約があり、現状の評価項目の検証に留まっている。

また、今回の検証では対面指導時に判断できる項目のみを採択しているため、その他の指導者として必要なスキルについては言及していない。指導者の人間性、コミュニケーション能力など、その他の要素についても検証が必要である。

参考文献

桑原洋一, 齊藤俊弘, 稲垣義明 (1993) 検者内および検者間の Reliability (再現性, 信頼性) の検討 —なぜ統計学的優位が得られないのか. 呼と循, 41: 945-952.

Landis, J.R. and Koch, G.G. (1977) The measurement of observer agreement for categorical data. Biometrics, 33: 159-174.

日本チアダンス協会. About: チアダンスとは. <http://www.jcda.jp/about/cheer-dance.html>, (参照日 2016年11月1日).

日本チアリーディング協会. チアリーディングについて: チアリーディングとは. https://www.fjca.jp/smp/cheerleading/contents_01.php (参照日 2016年11月1日).

対馬栄輝 (2011) SPSS で学ぶ医療系データ解析. 東京図書: 東京, pp.195-214.

Portney, L.G. and Watkins, M.P. (1993) Foundations of clinical research: Applications to practice, Appleton and Lange, USA, pp.505-516.

ワールドスポーツコミュニティ (2013) チアリーディング選手権大会. <http://www.plus-blog.sportsnavi.com/wsc-bar/article/259> (参照日 2016年11月1日).

分岐鎖アミノ酸 (BCAA) 摂取がレジスタンス運動後の遅発性筋痛および筋疲労に及ぼす影響